

テント芝居 胸躍る

自由な表現、ライブ感

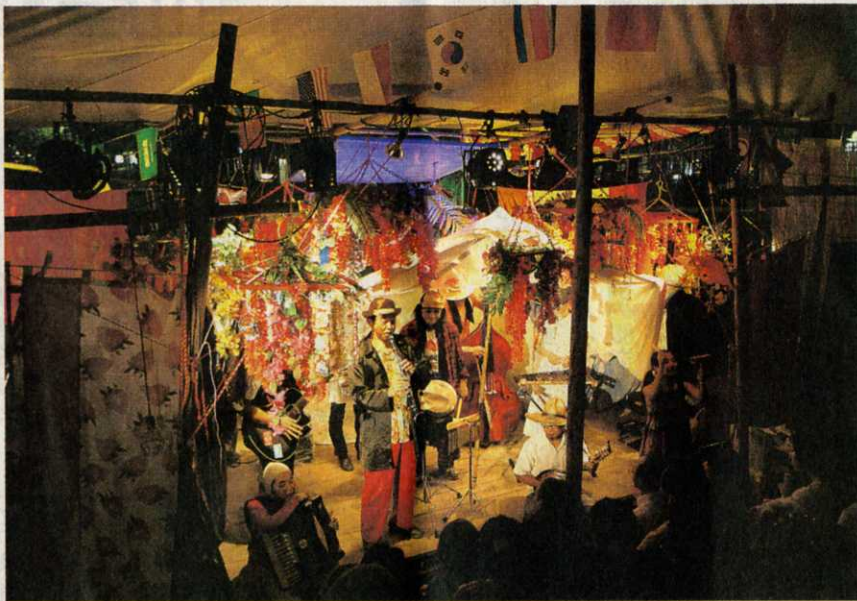
公園や神社の境内に天幕を張り、独自色の濃い芝居を上演するテント公演。往時はアンターグラウンド演劇の象徴のような存在だったが、今もファンの間では根強い支持を集めている。舞台をつくる側の思いを、仙台市で行われたテント公演で聞いた。

鹿兒島の劇団「どくんこ」来仙公演

8月21日夜。青葉区の錦のよう交錯する流れが面町公園に、鹿兒島県出水市 白い。進むに従って後方の劇団「どくんこ」のテント幕や飾りが取り払われ、柱ト劇場が現れた。9四方とテントの構造があらわにの天幕を鉄柱で支え、側面 になった。

によらずを掛けた独特の造り。南国風の飾りを幾つもの研究を母体に1983年つるした舞台がきらびやかだ。いたま市が拠点だった。5

上演したのは「ただちに犬 Deluxe」。さま 北海道、東北と回ってテントさまざまなエピソードがゲームト興行を続ける。仙台は19



どくんこの公演「ただちに犬 Deluxe」。劇の進行につれて後ろの幕などが外され、野外の空間も自在に活用した展開になった

「ハプニングも楽しもう」

カ所目の公演地で、今後は西日本へ南下していくとい

テント公演にこだわる理由として、俳優の暗恵くらあく(健太さん47)は「演劇表現の制約が少ない」ことを挙げる。「既存の劇場にある壁やどんちようがなく、どんな空間でもつくることのできる自由さがいい」

「つくり上げた芝居をそのまま持ち歩ける」のも利点だが、野外でのテント公演は救急車のサイレン音が飛び込んできたり、天候が急変したり、ハプニングが付きもの。「だから、8割方揺るがない表現をしっかりとることが大切」と暗恵さんは説明する。「その上で芝居と一緒に、ハプニングが引き起こすライブ感も楽しんでほしい」

この公演で、受け入れ担当として制作・宣伝を請け



開演前のテント劇場。劇団員自ら呼び込みに立つ